

# 実況中継!! 全国の乾田直播2015年編 第7回雪国直播サミット

## in Iwamizawa

2009年に初めて開催された雪国直播サミットが今年7年目を迎えた。当初は「技術課題」であった乾田直播挑戦者の悩みも、いまでは「経営課題」へと変化を遂げた。乾田直播に挑戦を続けてきた勇者らの足跡をたどる棚卸の意味を含めた今回のイベント。会場ではどのようなことが語られたのだろうか――。

文/齊藤義崇、撮影/昆吉則・土を考える会事務局

### 幕開きから7年分の棚卸へ

雪国である北海道と東北。厳しい寒さと豪雪の気候は、温暖な地帯をルーツとする水稲栽培に、幾度となく冷害の被害をもたらした。全国の水田面積（転作率）はおよそ250万ha（42%）、北海道20万ha（55%）、東北60万ha（40%）。冷害の克服に加え、需要の減り続けるコメは生産調整を余儀なくされ、昭和40年代の機械移植の普及以降、水稲の技術革新は進まなくなった。そんななかでさまざまな角度から注目された直播栽培だが、とくに乾田直播（以下、乾直）は、変わり者の挑戦者たちの「草だらけの危険な栽培方法」でしかなかった。

その変わり者の挑戦者たちの集い「雪国直播サミット」は今年で7回目。去る8月21～22日の2日間、北海道岩見沢市で開催された。2009年の第1回目の開催地は北海道岩見沢市、それ以来、第2回は岩手、第3回は北海道妹背牛町、第4回は青森、第5回は北海道名寄市、第6回は宮城と、北海道土を考える会と東北土を考える会が隔年で企画運営をしてきた。

今回のサミットが、原点復帰、棚卸と銘打ったのは、岩見沢で乾直の

栽培を行なう挑戦者の取り組みが、7年のときを経て全国一の400haの大団地を形成するに至ったからだ。偉業達成のキーワードは、「水田の輪作」「GPSの駆使」「直播の収量UP」の3つ。すべてが実現し、革新技術は地元で当たり前になりつつある。今回は東北の挑戦者に加え、全国から80名余りが参加した。2日間の棚卸作業の全容を実践者紹介と技術革新の視点から報告する。

### 極まる技と実践力

バスに乗車する皆のテンションは高い。7年ぶりに目にする岩見沢の水田はどうなっているのか、参加者の胸が躍るのは当然だろう。3カ所の現地視察は、移動を含め午後1時からの2時間。現地視察のバスを待つ3名は「輪作の王者」新田慎太郎氏、「機械技術の天才」西谷内智治氏、「栽培技術の研究者」濱本壮男氏。顔なじみとの再会と緊張で同じくテンションの高まりを見せた。

新田氏の経営は、もはや水田での転作の域を超え、畑作の域を極めている。作物は無代かき移植水稲、乾直水稲、子実トウモロコシ、小麦、大豆、ナタネ、甜菜の7つ。作業機は可能な限り汎用し、原価計算に裏付けられた綿密な作付計画を練る。

第7回雪国直播サミットin Iwamizawa



濱本壮男 氏 (北海道岩見沢市)

乾直歴7~8年。経営面積は約29ha。水稲10.9haのうち6割が乾直。「しっかりと田と畑を回す。狂ったサイクルを元に戻す」ことを目標に掲げる



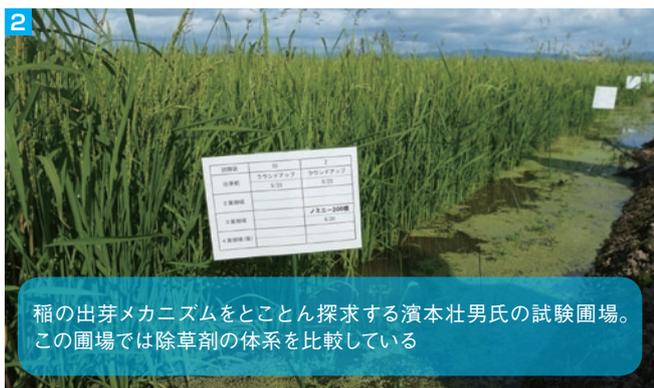
西谷内智治 氏 (北海道岩見沢市)

乾直歴9年。約32haの経営面積のうち水稲は4.8haで、すべて乾直で行なう。規模拡大と作業の競合回避のために始めた乾直で「輪作の確立」を目指す



新田慎太郎 氏 (北海道岩見沢市)

乾直歴13年。経営面積約34haのうち水稲は9.7ha(乾直6ha)。田畑輪換をスムーズに行なうために乾直を取り入れ、目標は「安定生産。経営全体では作物ごとの格差是正と平準化」



2 稲の出芽メカニズムをとことん探求する濱本壮男氏の試験圃場。この圃場では除草剤の体系を比較している



1 新田慎太郎氏の愛用する播種体系は、トラクター(JD 6630)+パワーハロー&バックローラー(クーン)+ドリルシーダー(サルキー)

ブラウ耕の実践と輪作による土づくりは本人曰く「良い土を作れば、水田でもどの作物もたくさんよく穫れる」。後日、ナタネ収穫後の圃場にプラウをかけた直後を目の当たりにしたとき、砕土でもしたのかと感じるほど、土はこなれていた。見事な栽培技術にうなずき、圧倒される視察となった。

西谷内氏の乾直水田はもはや芸術品だ。自ら制作したコンビネーションハローは、RTK・GPSの誘導とたゆまぬ土づくりと相まって、穂がそろっている。某グルメリポーターの言葉を借りるなら「水田のIT革命や」である。もはや他の追随を許さず、コッコツ大胆な努力家の飽くなき技術革新はとどまることを知らない。西谷内氏は「人と技術との出会いで人生が変わった」と常々口にしていて、乾直と輪作のさらなる高みを目指す実証試験中の乾直水田は、時間が経つことさえ忘れるくらい、参加者の胸を熱くしただろう。

濱本氏の乾直歴は8年目となる。ある講演で「元普及員ですか?」という質問が出るほど、探求心と科学的な裏付けを忘れず、相手にきちんと伝える力を持つ。水稲出芽のメカニズムは得意分野で、北国の寒い春でも苗立率は、いまや70%を超える。旺盛な分けつは、参加者の目を奪い、

涼しくも説得力ある説明は「北海道に濱本あり」と関係者も舌を巻くほどの乾直ライブとなった。

冒頭の現地視察はその後の企画を俄然盛り上げる、納得のいくものだった。会場に戻った参加者らは「凄かった!」と口にした。休憩時間は、視察の余韻に浸り、7年の回想録でもあるポスターを眺めるに、ほどよい時間であったようだ。

情報交換で賑わう「百貨店」

室内に場所を移してのありきたりな講演プログラムは行なわず、「第2回北海道乾直百貨店」から始まった。出店したのは6店舗。出店とは乾直挑戦者に会いたい、応援したい各メーカーさんが、情報交換を目的にしたブースのことを指す。私もスガノ農機(株)の石垣氏・佐藤氏と「乾直萬相談所」を出した。コンセプトは「人生・恋愛相談はお断り。占いは有料です」である。その他、「コハタ(病害虫相談)」「富貴堂(クラウドシステム紹介)」「ダウケミカル(茎葉処理剤の相談紹介)」「日産化学(ラウンドアップの使用相談)」「Meiji Seika ファルマ(薬剤相談)」が軒を連ねた。

何かをつかみたい、一つでも多くの情報を持ち帰りたい。そんな集ま

った人々の探求心とエネルギーに、これまでの「雪国直播サミット」の原点を感じる一幕であった。

## 初日のメインはクイズ対決

続いて、「クイズ乾直人に聞きました」というフレーズと懐かしい音楽に反応したのは、40代以上の参加者ら。続いてのプログラムは各地区対抗の「乾田直播クイズバトル」だ。5チームが編成され、乾直にちなんだ10問のクイズに回答した。事前に乾直実践者から集めたアンケート結果を軸に、参加者と司会者とで大いに盛り上がった。

チーム紹介をする。王者の風格「岩見沢ウエルカム軍団」、いつも仰天させる男たち「妹背牛人と名寄人」、

俺たちを忘れるな「今金と由仁と鶴川だよ」の3チームが北海道から参戦した。東北からは東北最強軍団「負けませんよ」、最後にもう1チーム「若さは負けません」スガノレディースチーム。

「TPPで不安なこと。回答で一番多かったのは？」とスクリーンに映し出されると「ピンポン」早押し音が鳴り響き、「なし」との回答に続いて「正解！」と司会者。出題ごとに得意とする分野の実践者と専門家が解説を加え、深まる勉強会は押しに押しして2時間に延長。「ワクワク脳で過ごす集会は、1人の天才を凌駕する閃きを生む」との持論は本当だと、企画・司会を務めた私は、乾直人のユーモアとパワーに彼らの挑戦と成功の源を再認識した。

## ワクワク脳で盛り上がる対談

サミット初日のオーラス（最終）企画は机なし、テーマなし、主役なしの対談「テツコの隣部屋」だ。顔ぶれは、新田慎太郎氏、盛川周祐氏（岩手県花巻市）、田村裕良氏（北海道妹背牛町）、小泉輝夫氏（千葉県成田市）、奥山孝明氏（岡山県岡山市）の全国で乾直と言えよこの人と呼ばれるマニアックな乾直人たちである。ワクワク脳はエンジン全開で話題は尽きない。

雑談から本題の「連作の乾直VS畑作との輪作乾直」へ。日本の水田経営が抱える課題は、言うまでもなく「需要が減るコメづくり」である。さらに技術では、連作の代かき水稲、

連作の転作作物、その障害は病害虫の多発と水田の疲弊などが挙げられた。その答えは会が終わった後も情報交換会へと持ち込まれた。

初日の企画は、7年間で変わった水田の作物と同様に、あの手この手の工夫が垣間見られ、乾杯！ならぬ「乾直！！」のコールでおなじみの今金人、仁木明氏の結びの御発声で、深夜に3次会で幕を閉じた。

（2日目の報告は次回掲載の予定）



にぎわう「乾直百貨店」



「優勝賞品はイタリア旅行(自費で行ってください!)」



クイズバトルで談笑する、東北最強軍団



乾直の雑談に盛り上がる首脳陣(笑)



「変わりの者の挑戦者たち」の集合写真

# 子実トウモロコシ検討会中止のおわびと報告

## 10月中旬に岩手県花巻市で開催予定

9月13日に茨城県境町で開催予定だった「水田農業イノベーション研究会2015 第1回：水田での子実トウモロコシ生産に関する検討会」は豪雨被害のために中止とさせていただきます。豪雨によりトウモロコシ作付圃場が水没しただけでなく、境町の市民生活にも甚大な被害が発生したからでした。たくさんの方々に参加申込をいただいておりますが、ここに改めて実演検討会中止のおわびを申し上げます。

開催予定だった検討会では、コンバインの収穫実演のほか、「梅山豚」<sup>メイシャントン</sup>を生産する養豚家で、ドライタイプのエコフィード飼料工場も経営する塚原昇氏の目指す地域での耕畜連携がテーマでした。

塚原氏が今年トウモロコシを播種した圃場

のうち、実演を予定していた約50a圃場は完全に水没してしまいました。また、もう1カ所の30a圃場も大雨に叩かれて3分の1程度が倒伏して多くの実が地面に落下し、カビが生えて穂発芽も発生していました。それにもかかわらず、残った17a程度で約2t(収穫時水分20%)が収穫できました。その飼料としての品質については後日報告します。

境町での検討会中止を受けて急ぎよ、岩手県花巻市で10月中旬に検討会を開催します。ここでは、コンバイン収穫したトウモロコシを乾燥機にかけずにそのままパックして流通させるハイモイスチャーコーンサイレージ製造の簡易的方法の実演とその利用についても検討を行います。後日、メールマガジンあるいはホームページにてご案内します。(昆吉則)



- 1 水没を逃れた別の30a圃場。約3分の1は豪雨により倒伏している。カビも出ており穂発芽もしている。同じ地域で播種時期の遅かったサイレージ用デントコーンにはまったく被害がなかった
- 2 収穫作業の実演を予定していた圃場は遠方から見る限り完全に消失している
- 3 4 5 境町での洪水被害の様子。200頭規模の肉牛肥育農家の畜舎が冠水し、200頭のうち約70頭は救出されたが、その大半が死んだ。そこかしこに浮いている死んだ牛を水陸両用車で岸に寄せている。この畜産農家1軒の被害だけでも軽く1億円を超えるだろう